

東京バッハ合唱団 月報

[第 632 号] 2015 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 632

February 2015

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

[特集]

3.11 被災地訪問演奏〈福島県・南相馬公演〉に備える

第 112 回定期演奏会の開催にあたって

大村 恵美子 (主宰者)

あれから 4 回目の春が近づき、3 月 11 日が巡ってきます。50 周年行事の遂行と並行して準備してきた〈南相馬公演〉が、いよいよ目前に迫ってきました。

私はもう待ちきれずに、公演の当日にご来場の南相馬の皆さまにお配りするプログラムの文面(下記)を、はやばやと用意しました。

その日を思い浮かべながら、団員の一人ひとりと心を合わせ、練習を積みつつ、良い準備をととのえてまいりたいと思います。



今日の出会いを祝してください

イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり嵐になった。人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うのではないか」と言った。

(新約聖書、マタイ福音書 8 章 23-27 節)

ライブツィヒ市の主要教会であるトーマス教会の音楽監督(カントール)に着任して 2 年目、38 歳のバッハ(1685-1750)は、この福音書章句に基づいて、カンタータ第 81 番《主イエス眠り いかによすべきわが望み》Jesus schläft, was soll ich hoffen? を作曲、1724 年 1 月 30 日の礼拝で演奏しました。のちに、1735 年にもバッハは再びこの同じ章句によって、カンタータ第 14 番《かたえに 主いまさずば》Wär Gott nicht mit uns diese Zeit を作曲していますので、私は、津波の被害をこうむられた東北の皆さまにバッハの音楽をお届けしたいと思ったとき、まっさきにこれら 2 曲のカンタータが

頭に浮かびました。けれども、1 回のプログラムを構成するのに、時間的な制約と、内容の多様性とを勘案して、カンタータ第 81 番のほか、(14 番の代わりに)別のもう 1 曲、カンタータ第 92 番《わが心 思い 神にゆだねたり》Ich hab in Gottes Herz und Sinn と、モテット《イエス よろこび》Jesu, meine Freude とを加えて、変化を持たせるようにしました。(カンタータ 14 番のほうも、なるべく早い機会に、定期演奏会でご紹介する予定です。)

モテット《イエス よろこび》も、カンタータ 81 番とほとんど同時に私の頭に浮かんだもので、実際に、この 81 番の最終曲は、「みもとにより 勇みてわれ 向かいゆかん」と歌うヨーハン・フランク(1618-1677)のコラールで、つづくモテットの第 3 曲と同じ歌詞・旋律なのです。さらに第 5 曲でも、同じコラールの別

東京バッハ合唱団 3.11 被災地訪問演奏

〈福島県・南相馬公演〉

—第 112 回定期演奏会—

<日時・会場>

2015 年 8 月 22 日(土) 開演 13:30
南相馬市民文化会館「ゆめはっと」大ホール

<プログラム>

- ・カンタータ第 92 番《わが心 思い 神にゆだねたり》
- ・(賛助演奏)「花は咲く」「大切なふるさと」「故郷」
- ・カンタータ第 81 番《主イエス眠り いかによすべきわが望み》
- ・モテット《イエス よろこび》

<出演>

- [ソプラノ] 光野孝子、[アルト] 佐々木まり子
- [テノール] 鏡 貴之、[バス] 山本悠尋
- [室内楽] 東京カンタータ室内管弦楽団
- [オルガン] 石川優歌
- [賛助出演] そうま地方合唱を楽しむ会合唱団
- [合唱] 東京バッハ合唱団
- [指揮/訳詞] 大村恵美子

<入場料>

前売り 1000 円(当日 1200 円、全席自由。事務局取扱い)

<協力>

そうま地方合唱を楽しむ会合唱団、福島子どもたちとともに・世田谷の会

<後援>

ドイツ連邦共和国大使館、世田谷区、杉並区、公益財団法人南相馬市文化振興事業団、福島民報社、福島民友新聞

の節によって、嵐や地震が襲って、地が減ぶようなことがあっても、「われはここに立ちて歌う 大なる安らぎもて。み力 支えたもう われを。大地も奈落も もださん、いまなおどよめけど」と、くじけない心を表現します。

冒頭にご紹介しようとする、カンタータ 92 番は、「わが思い 心にゆだねたり」というパウル・ゲールハルト (1607-1776) のコラールを、9 楽曲全体にわたって展開して、「死の道と 暗き谷間を行くとも、主 誘(いざの)う小径 われはたどり進む。……天(あま) つみ国にて とわに頌め歌わん」と、生死を超越した、ゆるがぬ心境を歌います。

私たちは、地震・津波の自然災害と、そのうえ、原発事故の深刻な人災とを同時にこうむり、心を大きくゆすぶられました。これまでの地球の歴史、日本国土の歴史を今さらながら学んで、人間の幾重にも担っている脆(もろ)さを詳しく知ることができました。地球全体に勢力をひろげて、まるで支配しおおせるかのように浮き上がっていた私たち人類は、深い反省から、正しい道を取り直して、前途に、(無理やり「咲かせる」のではなくて)「花が咲く」ことを、謙虚にのぞんで進みましょう。

今日、この同じ場に集い、声を合わせることを許してくださった皆さま方に、心からの感謝をささげます。

<南相馬公演>

ツアー参加団員、追加募集します

南相馬公演では、バッハのカンタータ 2 曲とモテットを日本語で歌います。われわれの魂そのものである母語によって、聴き手のこころの奥深くへ、バッハの生きたメッセージをお伝えしましょう。

みなさまのご参加をお待ちします。

<ツアー概要>

2015 年 8 月 21 日(金)～22 日(土) (1泊2日)

[1 日目] 早朝ツアー本隊移動(都内⇒南相馬、チャーターバス)。被災地を知る(市内・海岸)、現地の方々とのお歓会、宿泊先へ。

[2 日目] 午前会場準備、リハーサル。午後本番。帰京(南相馬⇒都内)。

<ツアー代金>

参加費(公演費用、企画経費などの分担金) 一人 35,000 円前後、および個人経費(交通・宿泊・食費など) 一人 20,000 円前後を見込んでいます(金額確定は 2015 年 4 月を予定。代金納入は分納も可、4 月頃より)。

<追加募集人数>

ツアー合唱団員は、全体で 50 名前後を想定しています。そのうち追加の募集定員は、各声部若干名、先着順。

<練習日程/会場>

土曜日 15:30～17:30、荻窪教会(日本キリスト教団)
月曜日 18:30～20:30、目白聖公会

◎詳細は、「募集要綱」をご請求ください。事務局

福島のこと、どれだけ知っていますか？

3.11 の被災地といっても、福島県には、とりわけ大きな重荷が背負わされています。

言うまでもなく、福島第 1 原発の破損と爆発事故による放射性物質の飛散のこと。私たちは、周辺地域の多くの人々が、何の指示もないままに、寒い中を漂うように避難しつづけたことを、後に報道で聞かされました。先祖代々の農地や牧場を、あるいは新築間もない住まいを、手放さざるを得なかった方々の話があり、それぞれには言語を絶する悲しいできごとが付随しています。県外への避難者が、いまだに 4 万 5 千人以上もいらっしゃるそうです。

南相馬公演までの 7 か月間、折にふれて、福島のこと、相馬地方のこと、すこしずつ学んでいこうと思います。被害のことと同時に、かの地の魅力についてもいっぱい知るべきことがあるはずです。(事務局)

<本のご紹介>

渡辺一技 [構成]

「福島の声を知ろう！」

3.11 後を生き抜く 7 人の証言

2014 年 12 月発行、オフィスエム
本体 1200 円

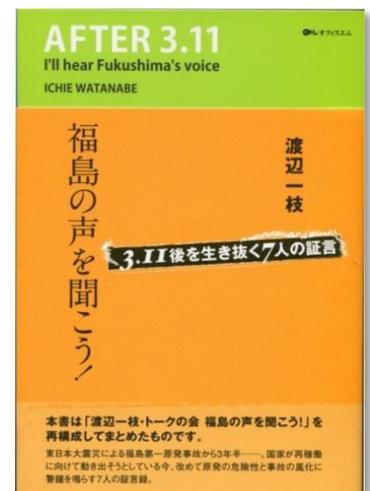
後援会員の原田知子様から、1 月の末に、メールをいただきました。

本日「福島の声を知ろう」という本を一冊お送りしました。

長野のオフィスエムという出版社の「紙の礫」— 原発に紙の礫を投げよう— という趣旨に賛同した協賛金で出版されたものです。福島公演をなさるといことで、読んで頂けたら、と思います。読んで頂ける方がありましたら在庫がありますのでお知らせください。

作家の渡辺一技(いちえ)さんが主宰するトークの会「福島の声を知ろう！」(2012 年 3 月～)に、語り手として招かれた 7 人の方々の証言録。原発の危険性と事故の風化に警鐘を鳴らしつづけます。

南相馬市原町区萱浜(かいばま)出身の上野敬幸さんは、その日、母親と長女(8 歳)を津波で亡くし、行方不明の父親と長男(当時 3 歳)を捜そうにも、放射能汚染の警戒区域に指定



されて避難を強いられ、いまだに……。それでも、「萱浜を再び“笑いあえる場所”に！」と、地元の消防団有志と復旧活動に尽力をつづけています。そのほかみな、被災地からの、勇気と希望の貴重な記録です。

ご一読をおすすめします。

事務局までご連絡いただければ、後援会の原田さんにお取次ぎします。

＜ご自宅練習のサポート＞

地方にお住まいの方、ご多忙の方、練習場に通えない方……朗報です。

東京バツハ合唱団の毎週の練習に通いたいけれど、遠隔の地にお住まいだったり、お勤めで時間に余裕がなかったり、さまざまな理由で、断念している方が大勢いらっしゃるはずで

す。50周年企画の連続演奏に際して、北海道や山形県にお住まいの方が、東京での練習に何度か出席しながら公演に参加なさいました。また以前の(45周年)《マタイ受難曲》公演のときは、秋田県から参加なさった方もいらっしゃいました。

このたびの、南相馬公演(第112回定期演奏会)についても、2、3の後援会員の方(元団員)から、趣旨に賛同してぜひ参加したいのですが、とご相談を受けています。

今回の上演曲のうち、難関はモテットBWV227《イエスよるこび》だろ

うと思いますが、これには音取り練習用の音源がウェブ上に公開されていて、当合唱団の<練習支援班>の宮城氏が、CDに焼いたものを用意してくださ

り、新入団員や参加希望者に分けてくださいますので、心強い限りですが、他の2曲のカンタータには、そのような便利なグッズはありません。そこで、同じく<練習支援班>の松尾氏にお諮りしたところ、ふだんの練習の録音をウェブ上に置き、ダウンロードして聴いてもらう、これなら自宅にいな

がら、練習の雰囲気も共有し、音取りの補助にも役立てていただ

第113回定期演奏会 <予告>

日常生活のバツハ — 教会暦を辿って

大村 恵美子

今年8月22日の南相馬公演が、東京バツハ合唱団の定期演奏会(第112回)と地元の「そうま地方合唱を楽しむ会合唱団」との合同演奏会を兼ねることになり、新年早々、その曲目の練習が始まったばかりですが、あわただしいことに、その次の定演(第113回)の会場使用の抽選会がもう行なわれました。

しばらくの間、私たちは団員数や後援会員数の減少などによる、緊縮運営を抜け出せない状況なので、今回もひきつづき中規模の公立の会場を狙いました。さ

<第113回定期演奏会>

日時：2016年5月28日(土) 午後2時開演
会場：府中の森芸術劇場ウィーンホール

テーマ：日常生活のバツハ

- ①カンタータ第148番《み名の栄光を讃えよ》
(1723年9月初演、三位一体節後第17日曜日)
- ②カンタータ第40番《地に来ませり 神のみ子》
(1723年12月初演、クリスマス第2日)
- ③カンタータ第16番《主 ほめ歌わん》
(1726年1月1日初演、新年)
- ④カンタータ第192番《ああ感謝せん 神に》
(1730年秋、教会暦用途不明、汎用)

今夏の被災地訪問演奏が8月末の実施となりましたので、その後の定期演奏会の設定もイレギュラーな構想となり、あまり近寄りすぎない範囲でということからこの時期が選ばれました。

昨年

末の定演(第111回“バツハのクリスマス音楽の花束”)は、いろいろ危惧もあ

* * *

ったのでしたが、寒い時期の夜(午後7時)という状況にもかかわらず、さ

極限の人生にあっても、希望を抱いて生き抜くという私たちの覚悟を分け合うものになりました。それでは、つづく来年の公演では、バッハ音楽でいったい何を表現したらよいのでしょうか。私は、安定した日常生活への祈りを渴望したいと思ったのです。3.11のカタストロフを体験した私たちは、何のおごりもなく、孤立しないで、人間同士が日々の生活を堅実に営めるように、というのが、どれほど貴重な未来であることか、痛感させられ、学ばせられました。

自然災害の大規模化だけでは物足りないのか、世界のいたるところで人間同士の憎み合い、殺し合いが激化してきたのは、どうしたことでしょうか。資本主義はエゴイズムに発したもので、力ある者が弱者たちを、生かさず殺さずひねり上げ、あげくに投げ捨ててしまうように、すべては荒れ果ててきました。平和だった群落を、勢力拡張の黒い手がわがものとし、その上さらに強力な軍勢が、無敵な武器を駆使して、敵も味方も息することのできない、毒に溢れた荒野にして残してゆく。もう祖国などどこにもない難民が、世界中を、海のただ中を、さまよい歩く。

こんなことになってしまった地球で、私たちは、日常の安らぎを探し求めます。18世紀のバッハにとっては、それが教会暦に秩序立てられた音楽でした。家族の半数を亡くしてしまったバッハにとっては、やはりそれも必死な戦いだったことを思います。

* * *

そんな思いを研ぎすませて、私は新しいプログラムづくりに挑んでみました（前ページ①～④）。4曲のうち3曲は、私たちがすでに何回か上演してきたものですが、今回が初めてとなる1曲は、この中でいちばん若い時期（といってもバッハ38歳の作）のカンタータ第148番《み名の栄光を讃えよ》です。私は、バッハの生涯をいくらかでも思い描けるように、各曲を初演の順に、1723年9月、同年12月、1726年1月、1730年秋、と並べて、かれの日常を偲ぶよすがとしました。ほぼ毎週の日曜に欠かさず新作カンタータを初演しつづける、いわゆる「ライブツィヒ時代第1期」（38歳～44歳）がそっくりおさまります。

1723年5月、家族とともにケーテンからライブツィヒへ移転。9月、①初演（25年の説も?）。6月、長男フリーデマン（12歳）と次男エマーヌエル（9歳）、トーマス学校入学。12月、②初演。

1724年4月（聖金曜日）《ヨハネ受難曲》初演。

1726年元旦、③初演。2月から6月まで、J. ルートヴィヒ・バッハのカンタータ上演がつづく。

1727年4月（聖金曜日）《マタイ受難曲》初演。この前後より、カンタータ初演が疎らになる。

1730年秋、④初演。

* * *

一年の後半は、教会暦では「三位一体節」後第1から第27日曜日として、生活に密着した題材を歌い（6

月頃からの約半年）、一年の前半では、イエスの誕生を待ち望む「待降節」（11月～12月）から始まって、12月25日（～27日）の「降誕節」を中心として、1月6日「顕現節」までのクリスマス・シーズン、次は厳冬に向かって、イエス晩年の十字架への道をたどる「受難節」、そして、春の訪れの3月～4月に生命の爆発が生じる「復活節（イースター）」、「昇天節」、「聖霊降臨節」へと、キリスト教の霊性の展開が迫ることになるのです。

ここで、私はあらためて主張したい。世の中に完全なものはない。宗教も、どれが一番高級なものか、誰もわからない。キリスト教も、イスラム教も、仏教も、地球上には、人間が肉に閉じこめられたままではなく、霊性に開眼し、行動で高められてゆくきっかけと要素が、ちりばめられているのです。ののしり合い、奪い合い、拒み合い、自分だけ生きのびようとする愚かなタコ壺から出て、向かい合いながら新鮮でおいしい空気を吸ってみましょう。

* * *

カンタータ第148番《み名の栄光を讃えよ》①は、前述の教会暦では、後半の三位一体節後の、日常生活のなかでの、落ち着いた信仰の訓練の時期のもの。

カンタータ第40番《地に來ませり 神のみ子》②はクリスマス（12/26）用、カンタータ第16番《主ほめ歌わん》③は元日（1/1）用ですが、私は、何回か再演するたびに、トランペット、ティンパニの鳴りどよめく大がかりな作品の間で、愛らしく、暗い地上に太陽の光がさしこまれた冬至のマジック、あるいは年ごとに循環する元日の慈しみを歌う、これらのカンタータが決して小品ではなく、深い内容をエネルギーに訴えるのを、クローズアップさせる機会をひそかに胸にあたためていたものと思われま。

そして、最初①と最後④を飾るのは、私たちがこの世に送り出してくれた、大きな恵みの存在への、尽きない感謝の歌です。勝ち負けやリベンジの応酬に明け暮れる、殺伐な人世は今すぐ手離そう。“Gute Nacht”（いざさらば）（モテット《イエスよろこび》第9曲、参照）と言いつくそう。大きな花は己れに、ではなく、「花は咲く」のを待ちこがれよう。——これが、被災地での出会い（第112回定演＝南相馬公演）後の、私の野望なのです。（2015.2.1記）

■ライブ録音/録画のご案内(第111回定期演奏会) “バッハのクリスマス音楽の花束”

マニフィカト挿入曲、BWV97、BWV62、BWV36
(聴衆参加のアンコール合唱も)

●CD(2枚組) ……2700円

●DVD ……3000円

●Blu-ray ……3500円

すべて内部価格・税込

送料は別途(メール便)

プログラム付き。事務局までご注文下さい

